

琉球入貢紀畧

山崎, 美成 / 鍋田, 晶山

(発行年 / Year)

1850

琉球入貢紀畧

完

210

22

琉球全貢紀略

嘉永庚戌再雕 靜幽堂梓

琉球全貢紀略序



海以外，作風潮而朝貢於我者，有琉球焉。有朝鮮焉。若琉球，則以其為朝、裔，相視若一家，不後或曠聘，而自島津氏兵艦一西以來，遂靡在禮服，永為我之附庸。然後隨時入朝，備明禮典，莫敢廢弛者，既二百有餘年，矜歲不亡，為盛歟。余年已七十餘，幸親見其入貢者，上且下笑，注手嘗述其梗槩，作全貢紀略一卷，以

三祥今茲庫成孟冬中山王復使玉川子貢方物
謝其辭封之恩於是余就前書補闕拾遺仍
再刻之而山崎北峯為之校訂以峰余老友
也博綜今古最通國家之典故今以其將仍生
照而此書始成豈非余之幸耶度長間我與
岩城者釋袋中老嘗赴珠球遂於駕鹽船
以入唐山盡人憐之峻拒不允袋中因住珠球
占偕伸馬幸明交善移居首里而桂林寺

為予之若珠球神遙記以記之立國難求又倣此
同遊訓曰未著珠球注未以便書家備未備
住軍不至閱之年乃由鳴率袋中一物以活石浸
波清跡絕險周旋于窮海孤島之間使以彼
戴依服石已雅德望之隆抑亦所謂此

皇國之跡烈而致余生遭雅興之日不敢忘躬
度險而見中山儀典於輦轎咫尺之下與余
中同其應接而受其恩勞焉為之幸也而大

矣遂併錄以鳴昇手之盛者如此

嘉永三年庚戌冬十月晶山老人時年七

十三題於木雅富書屋



牧巖原平書



引用書目

隋書

中山傳信錄

薩州舊傳集

分類年代記

京都將軍家譜

和漢合運

系圖

南浦文集

日本書紀

琉球國志畧

諸門跡譜

中原康富記

齋藤親基日記

異國往來記

駿府政事錄

元寬日記

輪池掌錄

琉球事畧

羅山文集

近世武家編年略

萬天日記

歷代備考

甘露叢

琉球聘使紀事

文露叢

享保日記

歷史要畧

三國通覽

連水見聞私記

琉球談

南島志

性靈集

今昔物語

中山世譜

保元物語

琉球奇譚

琉球神道記

琉球往來

琉球年代記

琉球雜話

聖之子



吳林

琉球國王



富仁煥公羽

土時



琉球國越来三明明堂樂水二百土歳書

琉球入貢紀畧目錄

琉球古の朝獻

右琉球を振玖島あゝひハ多祿あゝと云

琉球使者の事

琉球の名載籍子又云々

琉球國薩摩北附庸を云

永享以後琉球人ある

薩州大寺琉球を征伐す

琉球の古書神靈験

薩琉軍謀の辨

慶長以後入貢

附録

琉球國全圖

三十六島圖

中山世系

鎮西八市爲朝鬼が島へ渡る

佐階北次芽

増訂琉球入貢紀畧

琉球古の朝獻

琉球を吾邦に南海にあたる所の二の島國あり

國の風俗をよきと爲す所ありて文字を習ふべし

ありて國乃名ハ定えあぐり開闢より歴代の事

史書をいふものもあぐり此評あぐりハて

考へべし唐土此書を隋書にありて

たり煬帝の大業元年海師何遜といふ所の春秋の

こゝろ天氣晴れて海上風おどろくあり。時東北方を見
 候すふかたう煙霧の如くはるるれ氣あり。その
 まきと幾千里とつらとてちるべうらんじつ。すよ
 まく同じ三年帝相賜射朱寛といふものにて。海
 外れ異俗と訪ひ尋ねむ。すあつて。何變うねて
 いることのあれ。俱まつは修きなるふ。遂に琉球國
 小なり。たれこそ。言語通せん。あつて一人と接りて選
 まり。その翌年再朱寛と琉球まつらひて。鎖接せ
 ーむと。よも候とされ。朱寛の國に往くるあり。

小布甲と云ふ。還れり。そのに吾邦に使者あり。
 唐土にあり。彼布甲と云ふ。これ。美那久
 の人。此用やるところのねと。つらとて。吾邦に
 へ。これの事と記し。さる。これ。なり。と。よも。これ
 子も。て。候。ハ。琉球の人。は。振玖島の人。と。も。小
 吾邦へ。ちやく。往來。した。こと。を。知。れ。り。史。成
 按。す。も。推。古。天皇。二十四年。小。振玖。人。も。と
 なる。この。年。隋。の大業。十二年。は。あ。つ。け。り。こ。こ
 より。先。に。振玖。の。人。と。も。子。琉球。の。人。は。吾邦。へ。來

そ一とありしや阿らん、あゝざれば大業の初、若
邦の人れ、隋人ト著一調子うあひく、かくハ琉
球の名ハ、史子あるを、いふも推古天皇の御宇よ
里、そやぐ己子彼日より朝獻ありしと知るべし、

按ずる、推古天皇二十二年、掖玖の人來りし、兄
えり、史ハ掖玖、すくなく、益久、夜勿、益秋、和、も、南島
の朝獻、い、り、耐より始まる、をらん、これ掖玖と
ふ、ハ、琉球王のこゝとあり、し、又天武天皇十
年、多祢島へ使人をつづいて、その國地圖と夏一

む、こゝとあり、あり、あり、こゝの多祢島といふも、名琉球
のこゝとあり、南海の島と、此名、いふも、詳あり、さる、こ
より、琉球へ通し、船路、この多祢島を行、往來
する、を、とつて、多祢島とも、いふ、を、あらん、こゝの多祢
島、ハ、元明天皇和親王十年、南海の諸島、を、内
附す、と、いふ、を、南島

琉球使來る

琉球を掖玖の島人、ととも、推古天皇の御宇より、
來り、らん、が、そやぐ朝貢あり、いふ、を、かくて、その

國と往來ふたれを、（たづね）記載（し）するを、（し）か
 縣開曉度（けんかい）のそあ、（し）あるを、（し）あき、（し）の故あり
 とも、（し）その國も、（し）あ、（し）れ島、（し）い、（し）づれ
 の國に附庸（ふよう）あ、（し）通使（つうし）を、（し）づ、（し）の洪
 武年間琉球（りゅうきゅう）ハ察度王（さつど）の附（つ）あ、（し）冊封（さくほう）とて、（し）唐
 土（ど）中山王（ちゅうざん）子封（ほう）せ、（し）彼、（し）往來（わうらい）、（し）制
 度文物（どぶつ）す、（し）唐土（たうど）あ、（し）ひて、（し）あ、（し）明の宣
 徳七年（しん）宣宗（せんそう）内官（ないくわん）柴山（さいざん）と、（し）臣（しん）あ、（し）て、（し）勅
 書（しよ）と、（し）齋（さい）ら、（し）琉球國（りゅうきゅうこく）は、（し）中山王（ちゅうざん）あ、（し）人、（し）と

て、（し）邦（ほう）通使（つうし）せ、（し）宣徳七年（せんとく）も、（し）邦（ほう）永
 享四年（えいこう）子あ、（し）れ、（し）考（かう）あ、（し）上（じやう）な、（し）と
 里（り）や、（し）往來（わうらい）結（けつ）え、（し）宣宗（せんそう）つ、（し）我邦（わがくに）ハ使
 せ、（し）日年（にっねん）と、（し）再（また）ひ、（し）邦（ほう）琉球使（りゅうきゅうし）は、（し）れ
 子始（こ）め、（し）これ、（し）悔（くわい）も、（し）明の正統元年（せいとう）英宗（えいそう）流
 球（りゅうきゅう）貢使（きんし）使（し）是堅（し）と、（し）回（くわい）勅（しよ）と、（し）齋（さい）ら、（し）日本國（にっぽんこく）
 王（わう）原義教（げんぎきやう）子諭（ごん）す、（し）永享八年（えいこう）嘉禧三年（かきし）琉球（りゅうきゅう）の
 長吏（ちやうし）令良（れいりやう）の、（し）日本國（にっぽんこく）王（わう）子（し）特（とく）諭（ごん）す、（し）大永四年（たいえい）年（ねん）の
 山（さん）唐信録（たうしんろく）、（し）琉球國（りゅうきゅうこく）志（し）、（し）と、（し）あ、（し）月（げつ）の、（し）邦（ほう）書（しよ）と、（し）贈

琉球使ふ命せらるることもあつて、さうおもて

琉球ハもとより吾邦の属島ありとぞおもひけ

るあれども、高麗あり、その國修来するも、さや

絶ゆるも、さや、載籍は、さや、そのも、倭は一二

條のさや、それ詳あるとて記し、そのあ

るさや、弘法大師の性靈集、不羈、羽、推、肝

耽羅三振心、北氣夕發失、勝、而求之、虎性、とつ

文あり、これハ、唐大使賀能、さや、子代、撰

る、福州觀察使、とあるの書、延暦二十

年の事なり、あ、今昔物語、智證大師の傳、

仁孝三年八月九日、宋の商人、良暉、年、來、琉、西

ふありて、宋、さや、にあひて、これ、私、さや、

く、次の日、辰、時、さや、琉球國、不、漂、着、

る、れ國を海中、さや、人、と、食、ふ國あり、その、

風、さや、さや、方、を、知、さや、さや、大陸の、

と見、さや、數十、れ人、群、を、お、け、排、御、す、飲、良、暉、こ

れ、を、見、さや、悲、ふ、和、南、を、の、故、を、同、ひ、さや、さや、

五舟在島
そのふれき日
らくくく
梓き
やくの貢を
ひき
あえ
せ



梅林園



討ち奪ふべきより希ざらまへり。嘉吉元年
 三月十三日、樺山某はあぬこれ兵士と程をいめて
 討ち小向を永徳ちがたう山田式部といふもの
 傳正と討ち、舟首とを軍へ贈り、舟首の役
 人別垂、護岐村にそのもの、この討ちまでり、とそ
 ぞえり。その恩賞をうく薩おれ大古へ琉球と
 と賜り、討ち小向ひり、樺山をの外乃兵士といふ
 威状あるひ子を刀で下されり。此府よりいへり
 琉球國年毎に貢物とるに通信交易してかへり

薩摩此附庸とあるの故あり、舊傳集諸
 門跡譜

永享以後琉球人ある

文安五年琉球人ある、分類年
 代記

寶徳三年七月琉球北高人の船兵庫北津子某岸
 あつて、は護職細川某兆やかくんとつりせり、

彼商物と稱えり料足と返さず、先々年との借財

四五千貫ふ及でと返辦あり、此上賣物とおさへ

属られて琉球人難民のより、やうなまは時のへき力

あり、幸お三人布施下群古飯尾與三左衛門同六所

官謝那とソノ老いそふ不明人と事と議す結遇と
さうす禮あり貢おもせうとされハなわ家久使とろ
そ責をなとそとて後さうとろふよりて止こと
てゆす征伐しそその罪とふさんと渡ふ慶長十
四年春佐和で業と、禪山權左衛門久高と想大
ねと、平田右衛門左衛門益宗と副おこし、龍雲和尚
と軍呼こし、七島郡司と案内者とそと、その勞郡
公えん上えんいふわいアよきと、はさうとふふ
倉三子餘人軍船百餘艘と後一と二月二十二日纔
と解て琉球へ一發向するふのそと、おろし出陣の

我ひとて敵別々ふ中すも世ふさるる勇士の
新納武藏吉一氏老母入及しと、拙者と与しとる
が、拙者とおせられ、祇園の側とろとろまぐえ
送り、諸軍勢あて居々う、擇山久高上坐し居られ
す、謙退せられし、新納拙者中され々か、ハ今琉球
征伐の大功として、渡海あてと、即これ君の名代
あり、なやく大功の世はありけつといわれし、ハ
まゝ上坐しつれ々、これを諸軍の士年も自ん
彼し號令おされうと名、夫より乗船し山川の

後より順風は吹てあけ、大島小島岸一、この島人
防ぎ戦ひ々々ありて、幾砲とうちかけ、防ぐもの
おおよそ千人をうへ、手向わ者どもは討たう首て獲
て三百餘級化ハミか降人ふそ出々々々四月朔日
沖の永良郭と典論島と攻まり、運天に湊は衆
つけ、砲とらうへ城と攻めせし、首里の王城もえ
やうんとおおよそ一里をこえある、那覇の倭
はおもむき々々不倭の口を逆茂木乱抗すき同
おく水中は八歳の子と張る、こまは船のうへかハ

上より眼下は又おおよそ射とらんとの多々
とらへるの餘儀の要害とておおよそはる猶うけ
々々これよりて他は港より攻つて三日の間攻
めり、いふ負討死もなき、おおよそと新とらへハ
す、おおよそ進みて首里を攻入、王城をとり、圍ミ々々
おおよそふく琉球の諸勢、おおよそ那覇の倭ある城と
て籠り、王城ハ号勢あり、防ぎ戦ふつき兵士も子
くり々々、薩州勢れ急きり々々、おおよそ攻め破らん
とす、いさおひ、中山王及び三司官ホあり、敵す

多てあそむる。遊易しき。降参子出く、落城す及
 のたり。さう。那覇の城は、矢尻でるる人、物とて、こ
 敵船一艘も、るる。れ、ふ、い、う、子と、お、り、ふ、こ、つ、り、ま
 不意、不、好、り、押、お、せ、る、ま、ま、城、も、ち、や、く、巴、子、落、城
 と、ま、え、ま、れ、ハ、一、我、も、と、及、る、落、城、す、う、れ、ハ、速、子
 軍、此、勝、利、と、お、り、琉、球、忽、小、平、均、う、れ、ハ、早、船、残
 以、て、将、軍、家、へ、任、を、あ、り、う、を、甚、称、美、せ、さ、せ、ら、ぬ
 ひ、た、り、う、く、その、年、ハ、順、恩、の、時、節、子、お、れ、々、る、故
 子、諸、將、琉、球、小、平、均、う、り、う、翌、年、五、月、二、十、八、日、中、山、王

尚、寧、と、召、一、万、軍、士、凱、陣、す、同、八、月、薩、州、の、大、吉
 中、山、王、と、さ、ら、あ、ひ、馳、府、不、あ、り、て、登、城、す、時、中
 山、王、段、子、百、端、裡、に、皮、十、二、君、冬、平、布、二、百、疋、白、銀
 一、万、兩、大、刀、一、腰、と、獻、上、す、お、れ、ハ、代、始、め、は、吳
 國、所、手、子、入、り、と、さ、く、そ、れ、外、小、所、威、儀、遊、さ、れ、ま
 業、こ、う、て、所、腰、抱、あ、り、い、子、琉、球、王、と、賜、さ、り、々、り、中
 山、王、も、拜、領、物、あ、り、れ、り、琉、球、あ、り、薩、州、の
 所、庸、と、さ、り、子、々、々、さ、さ、あ、り、う、江、戸、子、々、り、
 将、軍、家、子、謁、う、々、々、小、米、千、俵、と、々、々、う、り、
 年



吳林園

紫湖星極何朝威萬里東來
貢獻特莫父令卿尤養函衣
冠鶴見漢官儀
九州百變典刑士絕島猶能
見古風龍結碧羅帷陸倕先
王鼓樂在其中

抗山大諾亭



新編 日本書紀

十三

新編 日本書紀

司恩謝使國頭按司ホトシ、方物と貢す、七月三日

ト所、日光山北所宮と拜す、輪池掌録

慶安二年九月、中山王尚質、恩謝使具志川按司等

と、方物と貢す、琉球、日光山の所宮、拜

す、

承應二年九月二十日、中山王尚質、賀慶使國頭按

司ホトシ、方物と貢す、羅山文集、和漢合選、、日光

山北所宮と拜す、

寛文十一年七月二十八日、中山王尚質、恩謝使、金武

王子ホトシ、方物と貢す、萬天、日光山の所

宮と拜す、琉球事畧、日記、

天和二年四月十一日、中山王尚質、賀慶使名護按

司恩納親方ホトシ、方物と貢す、萬天日記、

寶永七年十一月十八日、中山王尚質、賀慶使美里王

子富盛親方恩謝使豐見城王子與存親方ホトシ、

方物と貢す、琉球聘、東叡山北所宮と拜す、

山使の日光山、東叡山ホトシ、

二北時と始、

新編 日本書紀

十三

新編 日本書紀

正徳四年十二月二日中山王尚敬賀慶使與那城王

子恩謝使金武王子等とて方物を貢す、文露

享保三年十一月十三日中山王尚敬賀慶使越来

王子西平親方ホト方物を貢す、享保

寛延元年十二月十五日中山王尚敬賀慶使具志

川王子與那原親方ホト方物を貢す、歴史

寶曆二年十二月十五日中山王尚敬賀慶使今峰

仁王子ホト方物を貢す、歴史

明和元年十一月中山王尚敬賀慶使護谷山王子

ホト方物を貢す、三國通覽

寛政二年十二月二日中山王尚敬賀慶使宜所灣

王子ホト方物を貢す、琉球

寛政八年十二月六日中山王尚成恩謝使大耳見

王子安村親方ホト方物を貢す、輪池

文化三年十一月三日中山王尚顯恩謝使護谷

山王子小禄親方ホト方物を貢す、

天保三年十一月中山王尚育恩謝使豐見城王子

澤岫親方ホト方物を貢す、

天保十三年十一月中山王尚育賀慶使浦添王子
座喜味親方あてて方物で貢す

嘉永三年十一月中山王尚泰恩謝使玄川王子
封親方あてて方物で貢す

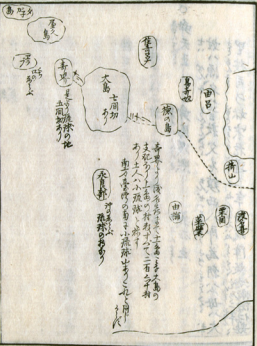
附録

琉球國全圖

琉球王不之省あり、中山を中頭省、山南を島老省、
山北を玉頭省あり、これ属府す、三十六、これと
同切とふ、同きりとハ、城介といふが如し、その同切は
領主であつて、按司といふ、三十六、これ属島あり、鬼界
が島を十二の島あり、即ちこれと五島七島とより、こ
まに北を島く子、履す、このころの物ハ、蕃菜、草蓐、蕉
絲、五色魚、鰹魚、珊瑚、海參、石芝、木三十種、子餘ふ、



七島ハ古クス
記スル所ニ
マニラ
大平山
三十八島の國



奇異ナラバ後者ニシテ土俗ニモ大島ノ
支配アリト云フ所ナラバ二有テナラバ
あり土人ハ小琉球ニ属ス
南方臺灣ノ島ニ小琉球ナリト云フ所ナ
ル

中山世系

天孫氏廿五紀

宋の淳熙年間天孫氏二十五紀の裔孫德微
を佐佐利勇横とて位を奪小庭を浦添
按司言敦義兵と起し利勇と討つ國人言敦
と推して位不就くこれを舜天王と云ふ
○舜天王 舜馬頻熙 義卒五
姓ハ源名ハ言敦父を鎮西八郎為朝公母ハ大
里按司の妹宋花道二年丙戌降誕

八頁 記事

二七

神皇正統記

元年 淳熙十四年丁未即位嘉熙元年一為嘉熙
在位五十一年嘉七十二年歳と云う又云義卒五
重名神皇傳云云在位十一年歳五十五の時美
祖子諭一々回今故政子乗七六年望小民泰
う人宜く大統を承けつぎと氏此父母さか
うと云ふ子固く侍一々此にま君即位と云ふ共
小勸め信小郎一々義卒位を譲るの信重
強きところを知りす故子より義傳と云ふ
考ふべし 爲朝公此血統舜大王より義卒五
三代中より絶り三つと云ふ七十二年

英祖王

大成王

美祖王 天孫氏の裔 祖此孫

美慈王

王城王

西威王

察度王

武寧王

尚思紹王

尚巴志王

尚忠王

尚思達王

尚金福王

尚泰久王

尚棟王

神皇八幡按司又世吉王と称す、明の臣徳山

年幸乃降、義教將軍嘉吉元年、在位九年、二十

九時子世子幼、と云ん、とて、小國人、とて、こま

と我、一、所領官金丸、即位、とて、とて、君と云

これより中山萬世王統の基と云く、とて、尚思

王、尚思王、とて、七

尚授王

尚授王、位子所す、とて、王祖正統の重、とて、

追尊、とて、稱す、

大正
新編
皇統
年表

三

新編
皇統
年表

尚國王

章名忠種名八金丸明の永樂十三年乙未降
誕生は儼然として龍鳳兆ありあはひま
下小座あり色金の如くいまは位子即さる乃
時泊村の人安里くわわ者くわひんくわひん人八侯
兆れ上子居るべきの徳ありといふ月成化
十二年七月二十八日薨在位七年壽六十七歳

尚宣威王

尚真王

尚清王

尚元王

尚永王

尚寧王

章名思徳明の嘉靖四十三年甲子降諡万
曆十七年即位同四十八年九月十九日薨在位
三十二年壽六十七歳度長十五年入貢す

尚豊王

尚賢王

尚貨王

尚貞王

尚純王

尚益王

尚敬王

尚穆王

八頁記略

三十三

新編
皇統
年表

尚成王

尚顯王

尚育王

尚泰王

右中山世系は畧あり、これより琉球尚貞王の時

尚弘後と云ふものより命より撰すところれ、中山

世譜に據りて記すところあり

鎮西八市為朝

鎮西八市為朝伊豆れ大島は流され、永万元年三月白鷺の仲の方へ飛移くと見え、定めてあるあゝんとて舟より乗りて地を移く、ある島小

恙なく老をうり、田もあゝ島をなゝ、汝等何と食事とす、同へも、魚をこゝろふ、その鳥ハ、

やゝあり、為朝とまて見え、大福の矢みて、木

子あると射落し、空を翔ると射殺し、なゝゝハ、

島のそれにも舌とをひておち、ある汝も我も

候と、ハかくの如く射殺さんと言へ、なゝ平伏

て候ひ、なゝ、島れ名と、同大女へ、鬼ガ島と、ハ、保

物この為朝は、は、鬼ガ島と、ハ、八市、今の琉球王のとあり、く、國人、その武勇、おある、服、

九引官、内官、を習、内尉、司書院、良醫寮、善房、
親長、年願人、武平、

里の子を、お姓あり、美少年と云ふ、年七、
ハ親重上とあり、親重上、官名あり、
武士とす、親重上と云ふ、
武士とす、親重上と云ふ、

嘉永三年庚戌十一月

薩府經畧

